



2019年6月

今回は、クマ・コブタ・ウサギ・ロバ・フクロ・カンガルーたちと少年が登場するお話……
『クマのプーさん（新版）』A.A. ミルン著 石井桃子訳 岩波書店 2000 をご紹介したいと思います。

私ごとではありますが、先日あべのハルカス美術館の「クマのプーさん展」に行きました。約90年前のイラストを描いたE.H.シェパードの貴重な原画を拝見し、刺激を受け、プーさんの本を改めて読みました。

上記の本は、世界中で愛されていることを再認識させてくれるものでした。

もちろん、ディズニーのプーさんとは一味違う世界を味わうことができます。まず、著者が息子クリストファー・ロビンにお話を語りかけ、プーさんの物語へ誘ってくれます。

話の内容は、大人が読んでも考えさせられるものもあります。私がこの本の中で、一番好きなお話は、「イーヨーがお誕生日にお祝いをふたつもらうお話」です。このお話では、一つのことに固執することなく、考え方を考えるだけで、幸せだと感じる事ができるんだと気付かされました。また、主に登場する、イーヨー（ロバ）とプーさんとコブタ、それぞれの思いやりがこのお話には詰まっています、読者も幸せを感じる事ができるお話でした。

プーさんは言葉を間違えることがあるのですが、例えば“てがみ”を“てまみ”というように石井桃子さんの訳も絶妙で、プーさんを愛おしいくらいかわいく思えます。

また、この本の挿絵はE.H.シェパードのクラシカルなプーさんたちが描かれていて、とてもかわいいです。

プーさんは知っているけど、本では読んだことがない人、ディズニーのプーさんしか知らない人は、ぜひこの本を読んで本当のプーさんの良さも知ってほしいと思います。

【著者紹介】

ミルン, A. A. (ミルン, A. A.) Milne, Alan Alexander

ロンドン生まれ。ケンブリッジ大学で数学を専攻したが、文筆家の道を志す。有名な諷刺雑誌「パンチ」で編集と執筆に携わり、劇作家として名を成した。1924年、幼い息子（1920年生まれ）を主人公にした詩集『クリストファー・ロビンのうた』が爆発的な成功をおさめ、代表作『クマのプーさん』（1926）を誕生させるきっかけとなった。その後、詩集『クマのプーさんとぼく』（1927）、『プー横丁にたった家』（1928）を相次いで発表、人気を集めた。

石井桃子

1907年生まれ。日本女子大学卒業。編集者・作家・翻訳家として、また児童図書館活動の草分けとして、戦後の児童文学界をリードしてきた。ミルン『クマのプーさん』、グレーアム『たのしい川べ』、ファージョン『ムギと王さま』など訳書多数。

